

プログラム

デュオ

フランス組曲 第5番 ----- J.S.バッハ

アルマンド、クーラント、サラバンド、ガボット
ブーレ、ルール、ジーク

編曲 織田英子

RAIN BOX ----- 織田英子

モデラート コン モト

(普通の速さで、しかし動きを感じて)

レント トランキーロ、テンポ プリモ

(静かにゆっくりと、最初の速さで)

ソロ

マリンバ ソナタ ----- P. タナー

アレグロ コン プリオ (いきいきと楽しげに)

アンダンテ ソステヌート (ゆっくり、音をつなげて)

モルト ヴィヴァーチェ (とてもいきいきと)

<休憩>

トリオ

風の時^{とき}間 (初演) ----- 織田英子

コン スピリト (いきいきと)

トランキーロ (静かに)

アレグロ (速く)

楽しい小品集 '93 ----- 編曲 織田英子

愛の挨拶

E. エルガー

楽興の時

F. シューベルト

月の光

C. ドビシー

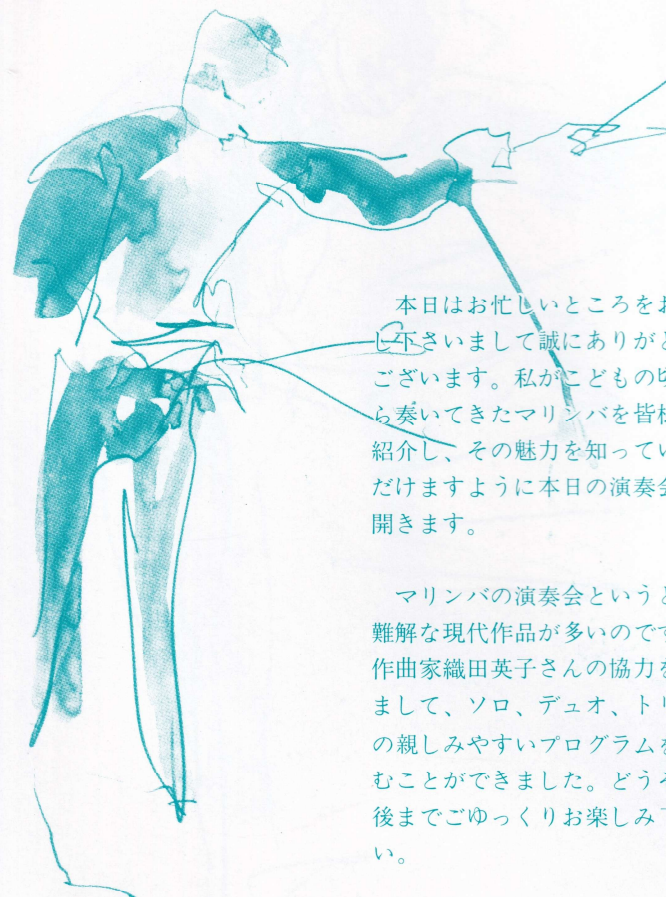
スペイン舞曲

M. ファーリャ

タンゴ

I. アルベニス

ごあいさつ



本日はお忙しいところをお越し下さりまして誠にありがとうございます。私が子どもの頃から奏いてきたマリンバを皆様に紹介し、その魅力を知っていただけますように本日の演奏会を開きます。

マリンバの演奏会というと、難解な現代作品が多いのですが、作曲家織田英子さんの協力を得まして、ソロ、デュオ、トリオの親しみやすいプログラムを組むことができました。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ下さい。

この場を借りまして、カットの古山浩一氏、会を催すためにご協力下さったたくさんの方々に、心よりお礼申し上げます。

1993年1月10日(日) 2:00PM カザルスホール

マリンバ：明瀬 由武 山口 多嘉子 田辺 由紀

ピアノ：高瀬 奈美 作曲：織田 英子

聴きどころ、そして私の作品

作曲家：織田 英子

明瀬さんがソロ、デュオ、トリオ、とマリンバの魅力をいくつも違った角度から見せてくださるなんて…。聴く側からすればこんなに贅沢な、そしてうれしいコンサートはありません。

せっかくですから、それぞれの聴きどころをワンポイントアドバイスしてみたいと思います。

まずソロについて。

無伴奏ソロは今日のプログラムにはありませんが、2本の手に5本も6本ものバチを持って、メロディーはもちろんのこと、ベースから伴奏の和音まで奏きこなしていくのです。しかも、メロディーラインを奏くバチと、ベースラインのバチの硬さを変えてあったりと、よく聴くと一見地味なスタイルですが、いろいろな細かい配慮がみられます。

ここに1台ピアノが入るとどうでしょう。

ピアノとマリンバという組み合わせは、もうすっかり定着したスタイルになっていますが、相性について言えば、中高音域の音質がよく似ているので、『歌とピアノ』や『弦楽器とピアノ』といった組み合わせほどにはしっくりいっていないように思えます。

しかし、伴奏部分をピアノが引き受けてくれるので、マリンバはメロディー楽器として自由闊達に動き回ることになります。ソロとしての主導権にぎり、ヴィルトゥオーソ的な活躍をする。——マリンバの輝きが一番感じられるのが、この伴奏付きと言えましょう。

そしてマリンバデュオになると…。

マリンバのシンプルな音色の良さを失わず、かつソロより自由な雰囲気が漂います。決して派手ではないけれども、お互いがメロディー楽器としての特性を生かした演奏で、聴く側はとてもしらックスした状態で受け入れやすいと思います。

今日のプログラムでもデュオから始まっていますが、明瀬さんの周到的な気配りが感じられます。

さてトリオについてです。

中南米のマリンバでは、トリオが一番オーソドックスな形ですが、それぞれのマリンバに2～3人の人が付き、ある人は最高音部、その隣の人はそれより少し低めの高音部、というふうにして、大勢で一緒に奏く習慣があります。一人一人の受け持つ音域はせいぜい1オクターブくらいなので簡単に奏けて、だから楽しめて、お祭りには欠かせない楽器です。

今日のマリンバトリオは、少しくらい難しい音符でも平気で奏いてくださる方たちばかりなので、本場のマリンバトリオより、はるかに複雑な音がしますが、やはり『楽しい』ことに変わりはありません。

小品集の最後の2曲にはピアノも加わってますます賑やかですから、心ゆくまで音楽を楽しんでいただけたと思います。ソロ、デュオ、トリオ、それぞれが魅力的ですが…。あなたはどれがお気に召しますか？

最後に、私の作品『RAIN BOX』と『風の時間』について、ちょっとだけ言わせてください。

『RAIN BOX』は89年6月に、そして『風の時間』は92年11月に、ともに明瀬さんの委嘱を受けて書いた作品です。

『RAIN BOX』とは雨の擬音装置のことを意味する劇場用語です。雨の描写音楽のつもりはなかったのですが、演奏されるたびに、聴いてくださった方々から「雨のいろんな表情を思い描きながら聴いた」とよく言われるのです。

作曲者の意図とは別に “曲が独り歩きをしているな”と感じるのはこういう時です。『風の時間』についても、作曲の基本的な姿勢は同じで、こうして机に向かっている間にも風が吹き、時は流れ・・・その悠々の流れを私のやり方で切り取って、切り口を提示しているだけなのです。

あとは『RAIN BOX』同様、うまく “独り歩き”を始めてくれることを願っています。

